

第3章

復興、そして未来へ

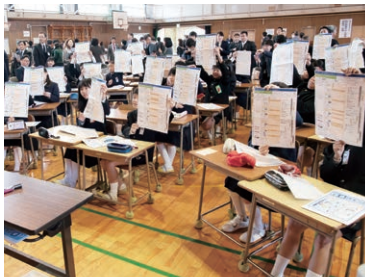
- 46 写真で振り返る
- 50 まちを守る治水対策 ―再生期―
- 53 復興を支えた人々 [Interview 09・10]
- 54 まびふれあい公園の整備
- 56 住民主体のまちづくり
- 56 復興を支えた人々 [Interview 11～17]
- 60 にぎわいと交流の創出
- 62 防災・減災の取り組み

[資料]

- 66 データで見る真備地区の復興
- 70 地図で見る真備地区の復興
- 72 真備地区の復興年表
- 80 住民意向調査および各種報告書



マービーふれあいセンターが復旧し通常業務を再開＝令和3年6月28日



令和2年度から始めた防災教育の授業。「マイ・タイムライン」を作成する児童たち



東京2020パラリンピック聖火倉敷市採火式で小学生が真備地区特産の竹を用いた採火棒で順番に火をつないだ＝令和3年8月16日



入居者が退去し、令和3年10月11日から撤去が始まった柳井原仮設団地(トレーラーハウス型)



災害公営住宅3団地計91戸が完成し、川辺団地で入居が開始＝令和3年3月25日



まさびの里保育園の新園舎が完成し保育再開＝令和3年11月1日



倉敷まさび支援学校で開かれた小田川堤防強化工事概成式＝令和4年3月26日



新柳井原橋が開通し、柳井原小学校児童による親柱の除幕＝令和4年8月17日



拡幅した小田川の堤防道路はサイクリングロードとしても使われている



小田川の堤防道路の幅を7mに拡幅する工事が概成＝令和4年3月、真備町服部（八高橋上流右岸）



末政川の堤防整備に併せて架け替えた有井橋が開通＝令和4年12月26日



「G7倉敷子どもサミット」をマービーふれあいセンターで開催＝令和5年3月4日



岡田小学校周辺の避難地・避難路整備工事が完成＝令和5年3月16日



平成30年9月14日に天皇、皇后両陛下が真備地区お見舞いのため行幸啓されたことを記念して石碑を設置＝令和5年7月2日、真備町尾崎



令和6年3月末に完成した小田川合流点付替え事業＝令和6年11月、小田川と高梁川の旧合流点から下流を望む



真備復興記念シンポジウムをマービーふれあいセンターで開催。直木賞作家の安部龍太郎氏が「吉備真備の物語」と題して基調講演を行った＝令和5年8月11日



改良復旧工事が終了した堤防を背に遊ぶ子どもたち＝令和5年6月、箭田小学校



まびふれあい公園の河川敷で芝生化イベント＝令和5年7月7・8日



かさ上げや堤防拡幅工事が完成した真谷川＝令和6年3月



災害から5年を迎え未来に向けて地元中学生がデザインしたのぼり旗＝令和5年7月



天皇、皇后両陛下が真備地区をご訪問＝令和6年5月26日



天皇、皇后両陛下のご訪問にあたり復興に向けた地域の思いを横断幕でお伝えした＝令和6年5月26日



高梁川・小田川緊急治水対策河川事務所の開所式＝令和6年3月29日



新しい堤防上に小田川合流点付替え事業竣工記念碑を建立。揮毫は、衆議院議員 加藤勝信先生にお願いした。「新しい小田川」、「高梁川」の流れの方向も刻んだ＝令和6年7月7日



まびふれあい公園開園後の最初のイベントとして開かれた「真備・船穂総おどり」＝令和6年7月13日



小田川合流点付替え事業等竣工記念式典＝令和6年3月23日



まびふれあい公園開園式でのテープカット。中心的な建物である竹のゲートなどを隈研吾氏が設計＝令和6年7月3日

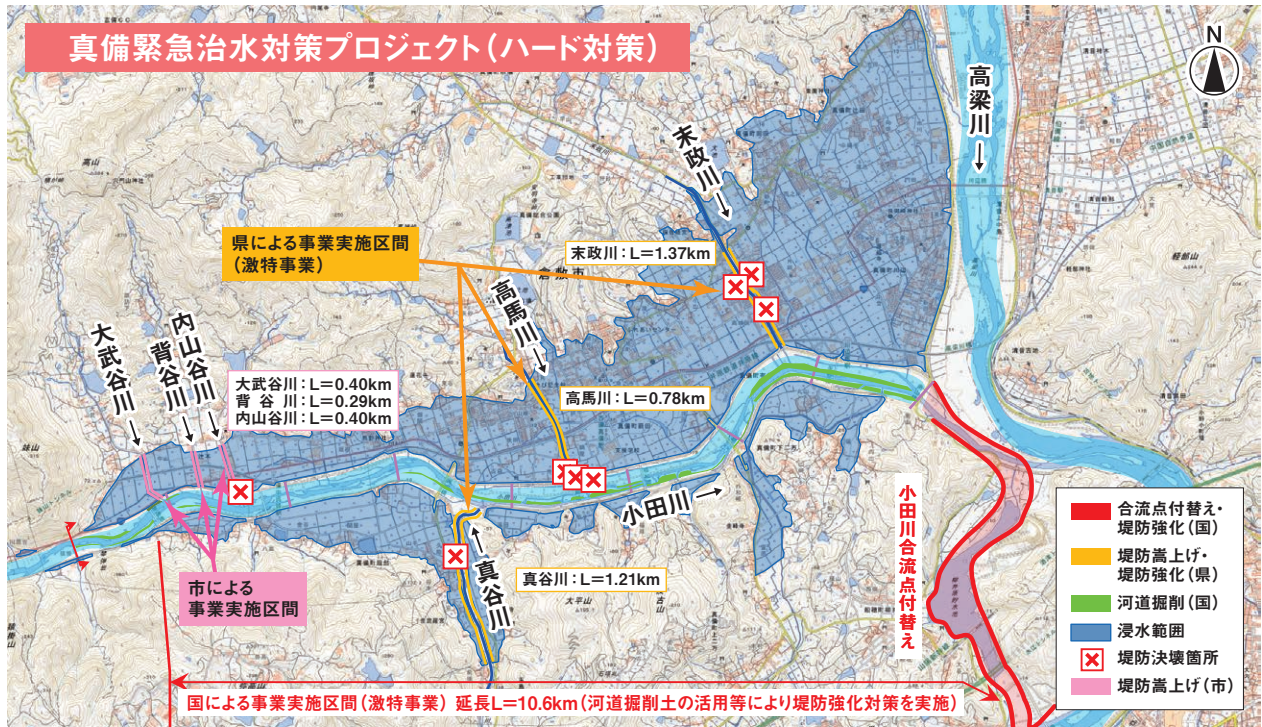
まちを守る治水対策—再生期—

国、県、市が連携して進めてきた「真備緊急治水対策プロジェクト※」が令和6年3月に完了した。事業の中核である小田川合流点付替え事業、小田川や支流の3河川の堤防強化、河道掘削などにより、地域の治水安全度は大きく向上した。

※真備緊急治水対策プロジェクト：国、県、市の3者が連携して、小田川合流点付替えなどのハード対策と、早期避難を促す避難体制づくりの推進や防災教育の強化などのソフト対策が一体となった取り組み



国、県、市の関係者をはじめ、関係市町の首長や地元関係者ら約550人が出席し、復興の大きな節目を祝った＝令和6年3月23日



■ 事業概要

事業期間	平成30年度～令和5年度
整備効果	平成30年7月豪雨と同等の出水を安全に流すことができる

	国事業	県事業
河川名	小田川	末政川、高馬川、真谷川
事業内容	合流点付替え、堤防強化、河道掘削	堤防嵩上げ、堤防強化、橋梁架替
事業費	約474億円	約110億円

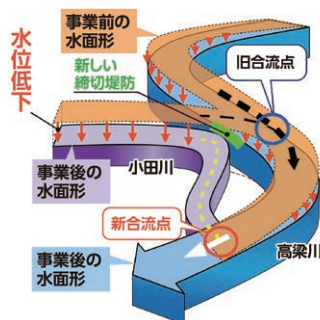
1 小田川合流点付替え事業(国)

本事業は、今から100年前の大正14年に竣工した、高梁川第1期改修工事（東高梁川と西高梁川を今の形の高梁川に一本化する工事）以来の大工事。小田川と高梁川の合流地点を約4.6km下流へ付け替え、洪水時の小田川の水位を低下させることを目的としている。再度災害防止と治水安全度の向上を図るため、工期を当初計画の令和10年度完成から5年前倒し、令和6年3月末に完成した。

■ 事業の効果

洪水時に高梁川からの背水の影響が減少し、小田川の水位が低下する

小田川を下流で合流させることにより、酒津地点の洪水時の水位も低下し、倉敷市街地の氾濫危険度が低減



堤防天端道路



新たに整備した堤防の天端道路は、サイクリングロードとしても活用＝令和6年3月

河川防災ステーション



備蓄資材やヘリポートを備える災害時の防災拠点を柳井原地区に設置。平常時は公園として利用＝令和6年4月



締切堤防・南山掘削法面



高梁川と小田川を分離するために新しく整備した堤防。小田川の川幅を確保するために南山を掘削。南山で発掘された城跡などは記録保存されている＝令和6年5月



完成後はスムーズに小田川が高梁川と合流している＝令和6年5月

2 小田川3支川(末政川・高馬川・真谷川)の改良復旧(県)

県は、真備緊急治水対策プロジェクトの一環として、堤防の決壊や越水などが起きた県管理の小田川の支流(末政川・高馬川・真谷川)において、再度災害防止を図るため、重点的な堤防整備(かさ上げ・堤防強化など)を進めた。令和6年3月の完成により、平成30年7月豪雨と同等の出水があっても安全に川の水を流すことが可能となった。



末政川の堤防整備に併せて架け替えた有井橋が開通。陸間(りっこう)*構造が解消され、車道と歩道も拡幅された＝令和4年12月26日

※陸間(りっこう)：堤防と交差する道路において、平常時には人や車が通れるように堤防の一部を道路幅だけ切り開き、洪水時にはそこから水が流れ込まないように閉鎖する施設



末政川



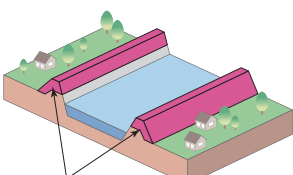
高馬川



真谷川

築堤・堤防かさ上げ

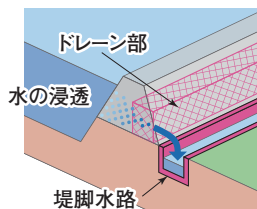
堤防の整備やかさ上げにより、河道断面を拡大させ、流下能力を向上させます。



築堤・堤防かさ上げ

ドレーン工(堤防強化)

堤体の川裏法尻を透水性の大きい材料で置き換え、堤体に浸透した水を速やかに排水します。



堤脚水路

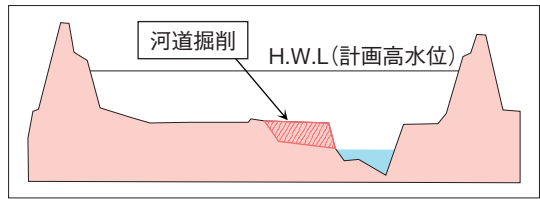
3 小田川・高梁川の河道掘削(国)

小田川と高梁川の河道掘削は、水が流れる断面を拡大するもので、小田川で約31万㎡、高梁川で約62万㎡の掘削を行い、令和4年1月末までに完了した。掘削した土は25mプールで約2,600杯分に相当し、決壊した小田川堤防の復旧や強化工事に有効利用した。



小田川の河道掘削前後

河道掘削のイメージ図



河道掘削の概要

	期間	全体河道掘削量
小田川	平成30年度 ～令和3年度まで (令和3年6月10日完了)	308,000㎡ (25mプール約856杯)
高梁川	令和元年度 ～令和3年度まで (令和4年1月末完了)	620,000㎡ (25mプール約1,723杯)

4 小田川の堤防強化(国・市)

国と市が連携・協力して進めてきた小田川の堤防強化工事は、小田川などの河道掘削土を有効利用し、堤防の天端幅を約5mから高梁川と同じ約7mに拡幅するとともに、法面の勾配を緩くし堤防を強化するもので、令和4年3月に概成した。

また、拡幅した堤防道路は、サイクリングロードとしても利用できるように整備するなど、治水対策と一体的に水辺空間の活用を図っている。サイクリングロードは、周辺自治体の既存サイクリングロードとの広域連携により、真備地区内外を東西に結ぶネットワークを形成し、交流人口の増加や地域の活性化が期待される。

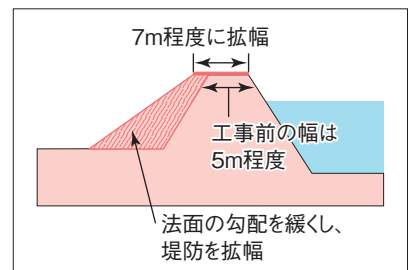


工事着手前の小田川堤防。天端幅は約5m
=平成31年2月、二万橋上流左岸



天端幅を約7mに拡幅した小田川堤防=
令和4年3月

小田川の堤防強化・拡幅イメージ



5 小田川3支川(大武谷川・背谷川・内山谷川)の改良(市)

市は、小田川の支流である大武谷川・背谷川・内山谷川について、河川堤防の安全性向上のため小田川の堤防と同じ高さまでかさ上げを行った。また、本工事に併せて、県が河川と国道486号の交差部に防水擁壁を施工し、陸閘構造を解消した。



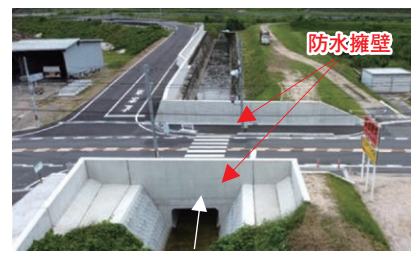
大武谷川



背谷川



内山谷川



内山谷川

思いくみ取り事業推進へ尽力

国土交通省大臣官房参事官
（インベシジョン）グループ企画専門官

榎谷 有吾さん



―高梁川・小田川緊急治水対策河川事務所所長として心がけていたことは？

5年間で事業を完成するという地域との約束を守ることは大前提として、真備に住んでいる皆さんと意見交換しながら、地域にとって必要なインフラ整備を実施できればと思っていました。

―小田川合流点付替え事業の完成でハード面の対策はおおむね完了しました。一方で、全国各地で毎年のように自然災害が発生しています。

事業は完成しましたが、安全に絶対はありません。憂い無ければ備え無し。ハードマップを確認するなど、災害に対し「正しい憂い」をもって、備えていたのだと思います。



小田川堤防強化工事の地元説明会

―災害から6年、復興の道のりを振り返って。

真備町に事務所を設置し、地域の皆さんには何度となく温かい言葉をいただきます。安心して仕事に取り組みたいと思います。1年目は、大小あわせて60件以上の説明会を開催し、その時にいただいた言葉や、思いを覚えていただいていたおかげで、無事、事業が完成できたと思っています。

―真備町の皆さんへメッセージをお願いします。

真備町は昔ながらの地域のつながりが残っていて、人が温かい、本当に住みやすい町です。小さい子を連れての赴任だったため、仕事と同時に子育てにも大きな不安を抱えていましたが、地域ぐるみで子どもの面倒をみていただき、真備町の皆さんの温かさに支えられた2年間でした。本当にありがとうございます。里帰りさせていただきますので、今後ともよろしくお願いします。

ますや・ゆうご 2005年、国土交通省に入省。中国地方整備局河川計画課課長、内閣官房副長官補（危機管理担当）付参事官補佐などを経て、19年4月～21年3月、高梁川・小田川緊急治水対策河川事務所所長を務める。23年4月から現職。1980年生まれ。

元 高梁川・小田川緊急治水対策河川事務所所長2人に聞く

課題対応し、完成へ向け努力

国土交通省中国地方整備局
技術開発調整官

濱田 靖彦さん



―高梁川・小田川緊急治水対策河川事務所所長として心がけていたことは？

「小田川合流点付替え事業は令和5年度未完成」と、着任前からずっと言い続けられていましたので、遅れることは地域の皆さんを不安にさせてしまうため、必ず完成させるという姿勢で臨んでいました。また、真備町の復興に向け活動されている皆さんの声をお聞きすることを心がけていました。その声の中から協力や背中を押してあげられることがないか考えていました。

―事業完成に向けて特に力を入れて取り組んだことは？

事業を予定どおり完成させるためには足踏みできないため、課題が出た場合は対応策を即断するように心がけていました。



ニュージーランド・クライストチャーチ市代表団に事業説明＝令和5年9月

た。また、事業の進捗よく状況がわかるように動画等により、発信していくことも行っていました。

―災害から6年、復興の道のりを振り返って。

真備町で過ごした3年は、コロナ禍で始まったため、難しい面はありましたが、所長として、また、時には一住民としてお付き合いさせていただき、復興のお手伝いもできたのではないかと思います。振り返ると、公務員生活の中でも忘れられないとても濃い時間となりました。

―真備町の皆さんへメッセージをお願いします。

ハード面の復旧は完了しましたが、復興はまだまだこれからだと思います。小田川も利用しながら、皆さんの抜群の発想力・行動力で真備町を盛り上げてください。3年間本当にありがとうございます。今後も、時間を見つけては遊びに行きたいと思っています。

はまだ・やすひこ 1990年、建設省（現国土交通省）入省。中国地方整備局河川計画課課長補佐、水管理・国土保全局防災課災害査定官などを経て、2021年4月～24年3月、高梁川・小田川緊急治水対策河川事務所所長を務める。24年4月から現職。1970年生まれ。

まびふれあい公園の整備

復興のシンボルである「まびふれあい公園」(復興防災公園)は、小田川と高馬川の堤防が決壊した場所に整備された面積約4.5㉩の公園である。平常時には、防災教育や真備の魅力発信の場として、災害時には、救援活動や一時的な避難の場として活用できる。



親しんでもらえる公園となるよう名称募集を行い、まびふれあい公園に名称が決定=令和5年6月29日



公園整備地の災害時の状況。小田川と高馬川の堤防が決壊し全域が浸水している=7月7日14時35分ごろ



市民と協力して、河川敷の芝生化を実施=令和5年7月7日~8日



公園を拠点に新たに整備した小田川堤防道路を活用したサイクリングロード



天皇、皇后両陛下がまびふれあい公園をご訪問され、住民や復興支援者の代表とご懇談された=令和6年5月26日

1 公園整備の取り組み

公園の整備にあたっては、住民とのワークショップや意見交換会などを通じて、寄せられた意見を参考に計画を進めるとともに、市民からの公園名称募集や住民と共同して河川敷の芝生化を図るなど、市民協働に取り組んだ。また、小田川かわまちづくり計画の認証やサイクリングロードの指定など、さまざまな手法による事業の推進を図った。



公園整備に向けてワークショップを開催=令和元年10月5日

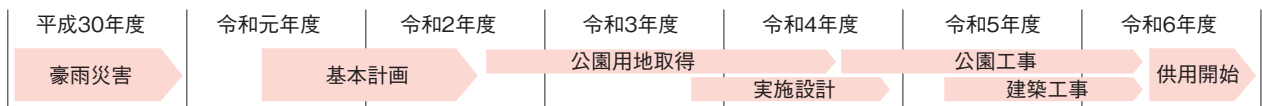


小田川の河道掘削土を有効利用し、堤防の高さまで盛土=令和4年2月

事業の沿革

年月	内容
令和元年8月31日	ワークショップ開催
令和元年10月5日	ワークショップ開催
令和元年11月24日	ワークショップ開催
令和2年2月19日~3月10日	パブリックコメント実施
令和2年3月31日	復興防災公園(仮称)基本計画公表
令和3年3月19日	復興防災公園(仮称)を拠点に位置付けた小田川かわまちづくり計画を登録
令和3年11月21日	設計業務委託契約締結 合同記者発表
令和4年2月1日~2月10日	地域団体アンケート実施
令和4年2月21日~3月11日	一般アンケート(市民対象)実施

年月	内容
令和4年3月1日	復興防災公園(仮称)意見交換会開催
令和4年3月12日	ワークショップ開催
令和4年5月18日	ワークショップ開催
令和5年3月1日~4月14日	復興防災公園(仮称)名称募集
令和5年6月29日	まびふれあい公園 名称決定
令和5年7月7日~8日	小田川河川敷芝生化イベント開催
令和6年3月19日	第74回全国植樹祭イベント開催
令和6年5月26日	天皇、皇后両陛下のご訪問
令和6年7月3日	まびふれあい公園開園



第1章
第2章
第3章

2 公園の概要

公園の中央には、世界的建築家の隈研吾氏のデザインによる「竹のゲート」がある。真備の山並みに調和する大屋根と真備らしい竹の意匠を凝らした約500㎡の建物で、防災学習や被災の資料などの展示にも利用できる「まなびのへや」のほか、防災備蓄倉庫などを備えている。また、芝すべり台や複合遊具のある「あそびのひろば」、水遊びのできる「じゃぶじゃぶひろば」のほか、災害時には、「しばふひろば」も活用して約400台の車の避難やヘリポートとしての利用が可能で、かまどベンチやマンホールトイレなどの防災施設も整備している。



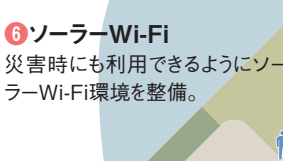
4 あそびのひろば

芝すべり台やアスレチック遊具、インクルーシブに配慮した複合遊具を設置。



5 じゃぶじゃぶひろば

小田川から引き込んだ水路の水を利用した水遊びのできる広場。



6 ソーラーWi-Fi

災害時にも利用できるようにソーラーWi-Fi環境を整備。



7 防災施設

一時的に避難された方のために、マンホールトイレやかまどベンチ、ソーラー照明を設置。



まびふれあい公園



[公園の仕様]

所在地／倉敷市真備町箭田4629-1
面積／公園部分約2.8％
河川敷部分約1.7％
合計約4.5％
種別／地区公園

[建物(竹のゲート)の仕様]

面積／約500㎡
構造／木造・鉄筋コンクリート
平家建

住民主体のまちづくり

真備地区には「川辺」「岡田」「菌」「二万」「箭田」「呉妹」「服部」の7つのまちづくり推進協議会が組織され、災害前からコミュニティー活動が活発に行われている。災害後は地域のさまざまな団体と連携をいっそう強化し、にぎわいづくりや防災訓練など多様な活動を展開している。



地域住民が手作りのキャンドルに火を灯し、犠牲者を追悼する行事「祈りの灯」を毎年開催＝令和6年7月6日、市真備支所



真備地区全体で情報共有するため、定期的に真備地区まちづくり推進協議会連絡会を開催



地域のお祭りや防災活動などを通じて、地域の絆を深め、愛着を育む取り組みが盛んに行われている

第1章

第2章

第3章

復興を支えた人々 Interview 11

みんなで助け合い 安心して暮らせる川辺に

川辺地区まちづくり推進協議会 会長 加藤 良子さん



川辺地区は、ほとんどの家が水没して全半壊判定されるなど大きな被害が出たところ。住民は皆川辺を離れ、避難所などの仮住まいに寝泊まりし、昼だけ片付けのために川辺に戻るといった厳しい生活を余儀なくされました。

こうした災害を乗り越え、住み慣れた川辺を安心して暮らせるまちにするために、「町内会どうなっている会」において町内会の立て直しを図り、これからのまちづくりについて話し合いました。

防災の取り組みとして、「川辺復興プロジェクトあるく」をはじめ各種団体との協働で、隣近所への声かけ・助け合いのある地域づくりを目指した防災訓練「黄色いタスキ大作戦」や、楽しさを盛り込んだ体験型防災研修「防災フェス」などを開催しました。

また、災害を後世に伝える川辺地区の記録誌「災害を忘れないで」を刊行し、防災への備えとして「川辺地区みんなのぼうさいガイドライン」も製作しました。さらに住みよく防災力の高いまちになるよう願っています。



「川辺地区みんなのぼうさいガイドライン」と「災害を忘れないで」

かとう・よしこ 2000年、川辺地区まちづくり推進協議会かわべつ子支援部に所属。20年4月、川辺地区まちづくり推進協議会会長に就任。21年度、真備地区まちづくり推進協議会連絡会会長を務める。1957年生まれ。

復興を支えた人々 Interview 12

顔が見え助け合える関係を

岡田地区まちづくり推進協議会会長 黒瀬 正典さん



岡田地区に住む約1500世帯の約7割が浸水し犠牲者も出ました。一時、収容人数の10倍を超える約2千人が身を寄せた岡田小学校で、避難所の運営を手伝いました。避難生活で緊張した身体をほぐしてもらうため、ラジオ体操と一緒に

したり、支援物資や食事を配ったり…。避難所が閉鎖されるまで約4カ月間、ほぼ毎日サポートしました。

地域の交流拠点である真備公民館岡田分館も浸水被害に遭いました。同分館管理組合長を兼ねていたため、使えなくなった備品を撤去し床を張って復旧。被災した家の片付けを手伝うボランティアの手配や悩み相談をしました。

人が集い、顔が見える関係づくりが大切だと実感しています。祭りや歌声喫茶、地元ゆかりの作家横溝正史にちなんだイベント「1000人の金田一耕助」など、にぎわいを生み出し、一体感の醸成に取り組んでいます。コミュニティを維持し何かあっても助け合って生きていく。そんな支え合いができるまちをつくっていききたいです。

くろせまさのり 合併前の旧真備町議を2期務め、2010年4月、岡田地区まちづくり推進協議会会長に就任。22年度、真備地区まちづくり推進協議会連絡会会長を務める。天理教志茂道分教会会長、1953年生まれ。



避難所の岡田小学校で食事の配給をしている様子＝平成30年7月

復興を支えた人々 Interview 13

イベントで地域の絆深める

菌地区まちづくり推進協議会元会長 奥田 隆志さん



菌地区は、有井の被害が大きく、9割近い世帯が半壊以上となりました。災害当時、私は7月6日の深夜から菌小学校で避難者の皆さんの駐車場の整理に明け方近くまで奔走しました。そして、帰宅後、初めて真備町の惨状を知りました。協議会役員と共に有井の土砂やがれき

撤去を計画しましたが、被害の大きさをみて断念。自分たちができることをしようと、地域の仮避難所になった菌分館の管理運営の手伝い、避難所の物資運搬の協力、支援物資の整理や避難所のトイレ清掃などに取り組みしました。

8月には被災した子どもたちを元気づけようと菌小学校でイベント「夏休みの夕べ」を開催。11月には幅広い世代向けの交流行事を開きました。その際は避難で散り散りになった住民を含む約800人が参加。再会を喜び合い、絆を深める姿を見て、人が交流する場づくりの必要性を強く感じました。

子どもの声が響きわたる元気なまちを目指して、これからの子どもたちの支援に尽力していききたいです。



地区外に避難した人を含め約800人が参加した「交流行事」＝平成30年11月

おくだたかし 中学校教員として38年間勤め、定年退職。2008年から菌地区まちづくり推進協議会で活動を始め、2018年4月から20年3月まで会長を務めた。18年度、真備地区まちづくり推進協議会連絡会会長を務める。1944年生まれ。

自分を守り、家族を守り、隣近所へ声掛けして、皆で避難

二万地区まちづくり推進協議会会長 神崎 均さん



被災早朝、わが家は無事だったので、二万橋へ走り、被害のすさまじさに身震いしながら、二万避難所へ入りました。当初の混乱の中、地域の皆さんで被災者の皆さんのお世話しかできませんでした。

あれから6年。小田川決壊の心配から解放された現在、二万地区は山間部であることから、大雨や地震による土砂災害への対応が大きな課題です。二万地区まちづくり推進協議会で作製した地区独自のハザードマップで、土砂災害範囲内にあるわが家を認識してもらい、大雨ではまず避難所へ避難し、何もなければ笑顔でわが家に帰る。これしかないです。地震災害では突然発生で事後避難となりますが、「自分を守り、家族を守り、隣近所へ声掛けして、皆で避難」のローガンは変わりません。ただし、地震が起きた場合の自分と家族の身を守る準備は、待ったなしで今です！

これからも、近い将来予測されている南海トラフ地震の対応にも備えていきたいです。

かんざきひとし 倉敷市の鉄鋼業大手に定年まで勤め、2017年4月、二万地区まちづくり推進協議会会長に就任。19年度には真備地区まちづくり推進協議会連絡会会長を務める。1947年生まれ。



二万小学校の校庭で被災者を元気づけるために開いた「夏祭り」

経験生かし「みんなで助かる」

箭田地区まちづくり推進協議会会長 野田 俊明さん



真備町の中心部に位置する箭田地区では、約2千世帯の7割が全半壊する被害がありました。被災直後は派遣されたボランティアの支援が必要な家につないだり、行政に先駆け、大量の被災ごみを県道沿いの空き地（幅5m、全長約4km）

が埋まるまで運搬したりと、うだるような暑さの中、地区のため奔走しました。被災後、住民の意識は大きく変わりました。年2回、小田川河川敷と箭田小学校で行う防災訓練には豪雨から6年がたつとも毎回100人ほどが参加します。地区独自のヘルプカードも作成し、誰とどう逃げるかといった情報を記入するほか、災害時避難所に掲示する名札も同封。当時、各避難所に誰がいるか一目で分ならず、多くの住民が家族や友人を探してさまよった経験を生かしました。

箭田地区の合言葉は、「みんなで助かる」。引き続き地域行事などで絆を深めつつ、民生委員や市社協と連携し高齢独居世帯にアプローチしていくのが今後の目標です。

のだとしあき 建設会社の全国勤務を経て、2023年4月、箭田地区まちづくり推進協議会会長に就任。24年度、真備地区まちづくり推進協議会連絡会会長も務める。1948年生まれ。



箭田小学校で実施した防災訓練の様子＝令和5年11月

未来を守る取り組みに全力

呉妹地区まちづくり推進協議会前会長 高槻 素文さん



西日本豪雨被災時、私は水没したわが家の屋根から、近所の方に救助されました。数日後に始まった、被災した家々や、分館長を務めていた真備公民館呉妹分館の片づけでは、災害の爪痕を目の当たりに。いずれも防災力強化の必要性を痛感する体験でした。

私は令和2年に呉妹地区まちづくり推進協議会会長に就任。防災班を新設して勉強会を開き、災害時の行動を事前に決めておく「マイ・タイムライン」づくりや近隣の要配慮者の把握と対策の検討などを進めました。また同年から、国土交通省の防災担当者の講演が目玉の、子どもから大人まで参加できる防災セミナーも年1回開催しました。

中秋の名月のころ、吉備真備公をしのんで開く「弾琴祭」は昭和24年から西日本豪雨の年にも途切れさせなかった当地区伝統の催しです。これら年中行事を盛り上げ、地域の絆を深めていくことも、災害発生時に地域住民の命を守る、重要な取り組みだと信じています。今後も楽しく地域の防災力を高めていきたいと思っています。



吉備真備公をしのぶ「弾琴祭」は、地域住民の連携強化にも一役買っている

たかつきもとふみ 倉敷市内の大手自動車製作所に定年まで勤め、2020年4月から24年3月まで呉妹地区まちづくり推進協議会会長。23年度、真備地区まちづくり推進協議会連絡会会長を務める。1947年生まれ。

日常の声かけが防災の一步

服部地区まちづくり推進協議会顧問 中尾 研一さん



7月7日午前1時ごろ、真谷川が決壊し、服部地区は約7割（約170世帯）が浸水被害に遭いました。私が住む地区10戸もほとんどが2階まで浸水。私は市の避難勧告発令前後に避難準備と避難の声かけをして回りました。その中には3

人の独居高齢者がいましたが、家族や親せきに連絡して迎えに来てもらったり、私の車で一緒に避難するなど地区全員、無事避難することができました。

災害を経験して最も大切だと感じているのは、地域のコミュニティです。普段から良い人間関係を築いていることで、避難の呼びかけなど素直に聞き入れてもらえる実感しました。また平成24年に立ち上げた小地域ケア会議の活動で、見守り対象者の緊急時連絡先を把握していたことも役立っています。

このことを踏まえ、被災後は地区防災計画策定セミナーを開催するとともに、「ふれあいの夕べ」など従前の服部まちづくりの各種行事を実施し、地域コミュニティの再興に力を入れています。

なかお・けんいち 高校卒業後、倉敷市の総合化学会社に就職し、1975年から真備町に在住。2011年4月から23年3月まで服部地区まちづくり推進協議会会長。20年度には真備地区まちづくり推進協議会連絡会会長を務める。1948年生まれ。



被災後半年間、板金工場跡地を借りて、「地区民集いの会」を定期的に開催

にぎわいと交流の創出

真備地区では、復旧・復興が進むにつれて、地域の祭りをはじめとするイベントが再開されるなど、人と人、地域と地域の交流が生まれ、まちのにぎわいが戻ってきている。

真備地区のシンボル「マービーふれあいセンター」では多様なイベントや講演が開催され、被災後の地域活性化の大きな一翼を担っている。また、同じく復興のシンボルとなる「まびふれあい公園」ではさまざまなイベントが開催され、多くの人々が集まり交流が生まれている。今後も、にぎわい創出や真備の魅力発信など、地域の新たな発展に向けた取り組みが期待される。



式典で演奏する吉備真備太鼓。太鼓等が水没したが、全国からの支援により活動再開＝令和6年3月23日



まびふれあい公園の開園後、はじめての大きな行事として「真備・船穂総おどり」を開催。過去最多となる25団体・約1,100人が参加＝令和6年7月13日



マービーふれあいセンターで新たに始まったロビーコンサートの様子。毎回、多くの聴衆が楽しんでいる



マービーふれあいセンター内のマービーカフェで提供される真備復興グルメ「南山掘削カレー」



真備地区を巡るサイクリングイベントを開催＝令和6年3月3日



真備中学校吹奏楽部



真備東中学校吹奏楽部

「真備復興記念シンポジウム」では、地元中学校吹奏楽部による演奏、歴史小説家の安部龍太郎さんによる基調講演などを実施＝令和5年8月11日



多くの人が来場した「まび・ふなおマルシェ」＝令和5年8月11日



真備町を元気にとの思いを込めて、平成30年から真備船穂商工会青年部が中心となって「復興阿吽祭」を開催

さまざまな素材を使ったサイクルスタンド

地域企業の本業に関する素材を使ったサイクルスタンドが、現在、真備地区内10カ所以上に設置されるなど、サイクリストを迎える環境整備が進められている。

県産ヒノキ製



特産の竹製



隣接する古墳(石室)にちなんだ石製





体験型防災フェス=令和6年6月2日
(川辺地区)



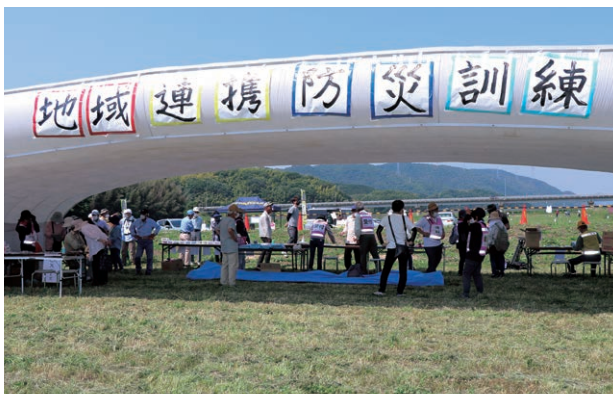
千歳楽を巡行して地域内を練り歩いた秋祭り=令和5年10月8日
(岡田地区)



真備地区出身の書道家井上桂園先生をしのぶ書き初め大会=令和4年1月5日
(菌地区)



幅広い世代が集う地区の体育祭=令和4年10月30日
(二万地区)



小田川の河川敷で行った防災訓練=令和4年5月22日
(箭田地区)



吉備真備公弾琴祭(琴弾岩で尺八と琴の演奏)=令和6年9月14日
(呉妹地区)



毎年恒例の農業体験=令和4年6月19日
(服部地区)



まちづくり推進協議会と市が連携して体験型農園を開設。農業体験を通じた交流の場となっている

防災・減災の取り組み

市では、災害の教訓を生かすため、地域と学校の連携による防災教育の推進、避難行動要支援者の避難支援、地区防災計画の策定推進など、市民・地域・行政が連携した災害対応力の強化などに取り組んでいる。



令和4年度から始めたくらしき防災フェア。令和6年度は約1万5,000人が来場するなど、防災の普及・啓発に取り組んでいる＝令和6年11月10日

1 倉敷市災害に強い地域をつくる検討会

市では、平成30年7月豪雨災害の教訓を今後を生かすため「倉敷市災害に強い地域をつくる検討会」（委員長・片田敏孝 東京大学大学院情報学環 特任教授）を設置し、自助・共助・公助の連携により命を守る避難行動を実行し、荒ぶる災害に地域が一体となって立ち向かう、災害に強い地域の醸成を目指すための検討を行った。

本検討会は、令和元年9月から令和2年11月にかけて5回開催し、令和3年3月に検討会から市に「地域と行政が今後目指すべき方針及び具体的な行動計画」として5つの方針が提言された。現在、本提言書に基づき、行政だけでなく地域全体が災害に強い地域づくりに向けて、主体的に取り組んでいる。

方針1	方針2	方針3	方針4	方針5
住民一人一人の避難行動の実行	地区防災計画の策定推進	防災教育の推進	避難行動要支援者の避難支援	災害対応型まちづくりの推進
「自らの命は自らが守る」意識の徹底、防災情報の収集や活用	地域が自主的に取り組む防災体制づくり、防災活動を通じた地域コミュニティの活性化	地域と学校の連携による防災教育の環境づくり	地域による避難行動要支援者への避難支援、健康長寿と支え合いの地域づくりの推進	災害リスクを軽減する防災まちづくりの推進



倉敷市災害に強い地域をつくる検討会の様子＝令和元年9月17日



片田委員長による防災講演会を開催して多くの市民が聴講＝令和2年2月1日

2 防災教育の推進

市教育委員会では、平成30年7月豪雨災害の教訓をふまえ、自分の命は自分で守ることができるよう、地域の特性や実情を踏まえた実践的な防災教育を推進している。

令和2年度からは、全ての市立小学校の3年生と5年生で3時間以上の学習時間を確保して「自助」について学習している。また、令和4年度からは、全ての市立中学校の2年生でも3時間以上の学習時間を確保して「自助」に加えて災害時に自分たちができる活動を考える「共助」についても学習し、家庭や地域への発信や連携ができるよう取り組みを行っている。



マイ・タイムライン検討ツール「逃げキット」

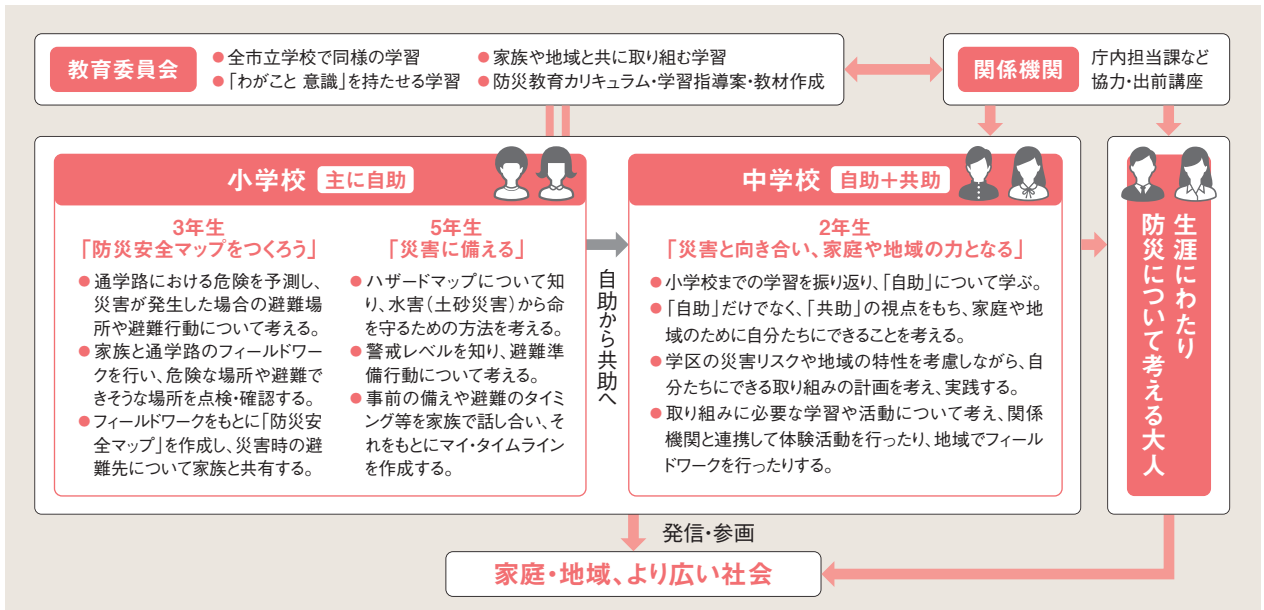


小学5年生の学習の様子。国土交通省が作成したマイ・タイムライン検討ツール「逃げキット」を活用して、避難するタイミングや場所を考える



中学2年生の学習の様子。「自助」だけでなく「共助」の姿勢を持つことを学ぶ

倉敷市の防災教育 全体構想図(令和4年7月)



くらしきジュニア防災リーダーの養成

住民団体が、市の防災教育を受けた小学5年生を対象とした防災教室を開講。「防災博士」を目指して、子どもたちが防災について、楽しく学び体験し、受講者へは、認定証とキーホルダーを進呈。

参加者の感想

- ・備えが大切だと思った
- ・三角巾で包帯が作れるようになった
- ・もっといっぱい調べて友達に伝えたい



防災ゲームで楽しく学び体験の様子

3 市民・地域・行政の災害対応力の強化

豪雨災害の経験を踏まえ、令和3年度から、これまでの地震対応訓練に加え、水害をテーマにした水害対応訓練を新たに実施するほか、避難所などの専門研修を実施するなど、全庁的な災害対応力の向上に取り組んでいる。

また、行政だけではなく、地域でも地震や水害を想定した訓練が活発に行われている。



小学校で開催した防災訓練の様子。各地区で自主防災組織などによる防災訓練を開催



川辺地区で約1,400世帯を対象に実施されている安否確認訓練。外から見える場所による防災訓練を開催



気象情報や被災状況を一元管理できる「総合防災情報システム」を活用して、水害対応訓練を実施。令和6年度はドローンで被害状況を確認する訓練も実施＝令和6年6月8日



災害以降、住民自らが小田川河川敷の樹林化防止に取り組み、草木の踏み倒しや、モニタリングを実施。踏み倒した場所には、簡易なマレットゴルフ場を整備するなど、住民自ら楽しみながら河川敷の管理を行う

倉敷防災ポータル

市内の災害関連情報(避難情報、避難所の開設状況、気象情報など)を提供する「倉敷防災ポータル」を令和2年8月から運用開始。

市のホームページで公開しています

4 地区防災計画の策定支援

各地区では、住民による避難計画など、地区の災害特性を踏まえた特色のある計画の策定・検討に取り組んでいる。



地区の自主防災組織が運営する届出避難所を記載するなど、地区の特性を踏まえた計画の作成が進む

定期的に意見交換会やワークショップを開催

6 防災の普及・啓発

令和4年度からは、市職員による防災出前講座に加え、倉敷市総合防災訓練として、大人から子どもまで、誰もが気軽に楽しく参加できる防災イベントとして「くらしき防災フェア」を開催している。

令和6年度には、1万5,000人超が参加し、楽しみながら防災を体験し学ぶなど、防災の普及・啓発に取り組んでいる。



5 避難行動要支援者の避難支援

市では、災害時に自力での避難が難しい高齢者や要支援者について、災害時の避難方法を事前に決めておく「個別避難計画」の策定を支援している。令和6年度には障がい者など、対象となる市内の要支援者約2,700人を戸別訪問し、避難を手助けしてくれる人や避難場所・避難経路を確認するなど、一人一人に寄り添った計画作りを進めている。



要支援者やケアマネジャーの意向を聞きながら個別避難計画策定を支援



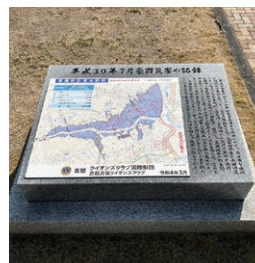
体験型イベント「くらしき防災フェア」の様子

7 災害の記憶を後世へ伝承

平成30年7月豪雨は、私たちにとって、これまで経験したことのない大災害となった。甚大な被害を受けた地域として、その経験や教訓を多くの人に伝え、災害に関する理解を深めることを自らの責務として、将来の防災・減災に生かせるようさまざまな活動に取り組んでいる。



実績浸水深標識



防災碑

防災標識・防災碑の設置

倉敷真備ライオンズクラブは、真備町復興支援事業として、住民の防災意識を高める目的で実績浸水深標識や防災碑などを真備地区内の49カ所に設置。標識などは市に寄贈され、防災訓練や児童・生徒の防災教育に活用している。

設置箇所数(真備地区)

避難所誘導標識	23カ所
避難所案内標識	8カ所
実績浸水深標識	16カ所
防災碑	2カ所

災害を語り継ぐ、水害伝承の展示会

地元住民でつくる実行委員会が、災害を後世に伝えていくため「水害伝承の展示会」を開催。約1,800人が来場した（令和4年7月1～4日）。

令和6年には第2回展示会を開催し、災害の記憶を後世に伝える活動に取り組んでいる（令和6年3月16～18日）。



中学生による防災ハンドブック作成

真備中学校の生徒会が、被災した生徒たちの経験を基に、全校生徒に困ったことや気づきなどをアンケート形式で聞き取りし、中学生目線での防災ノウハウや体験談をまとめたハンドブックを作成した。

授業の際に副読本として活用しているほか、市内中学校および公民館へ配布することで、教訓を広く伝える活動を行っている。



オレンジライン

小田川の堤防高を示すオレンジ色のライン（地上から約5mの位置）。平成30年7月豪雨以前から、箭田地区まちづくり推進協議会が、町中に浸水の危険性を伝える目印として、井原鉄道の橋桁や中学校の校舎外壁などに設置している。



井原鉄道の高架（吉備真備駅近く）や小学校の外壁に引かれたオレンジライン。写真左の右にあるブルーラインは平成30年7月豪雨の実績浸水深

平成30年西日本豪雨災害の「語り部活動」

令和3年度から、住民団体が市の市民企画提案事業を活用し、「平成30年西日本豪雨災害の真備町住民による語り部活動」に取り組んでいる。語り部の会や研修会を開催するほか、災害伝承のための活動成果のデジタルアーカイブ化や年次記録冊子の発行などを行っている。



語り部活動の事業報告の様子。語り部ネットワークまび＝令和6年3月17日

被災の教訓などを伝える資料の展示

まびふれあい公園の竹のゲート内の「まなびのへや」では、災害の様子や復興の記録、防災に関する資料の展示を行い、被災の教訓を伝える防災学習や市内外からの視察を積極的に受け入れ、災害の経験や復興状況を発信している。



まびふれあい公園の竹のゲート内の「まなびのへや」

市内中学生への防災学習の様子＝令和6年11月7日